

ワシミミズクの生態と習性

張守富・陳相君・張守林

山東省日照林業局

訳 福井和二

ワシミミズクはフクロウ目フクロウ科の大型猛禽である。広くユーラシア大陸およびアフリカ北部に分布し、国内でもいたるところで見られ、山東省では留鳥である。彼は昼間潜んでいて、夜活動し、人影のない深山に生息する。1984年以来、われわれは山東省日照市においてワシミミズク (*Bubo bubo kiautschensis* Reichnow) の生態習性を調査したと、飼育下の観察を合わせて報告する。

ワシミミズクの生息域は幾つかの山の上部で数は少ないが、この域内の橋子山、甲子山、河山、礮山、崖山などで必ず見ることができる。日没とともに「hei-hu」と鳴き、したがって、人々から「恨狐ヘンフウ」という俗名を賜っている。

1. 繁殖と生長、発育

ワシミミズクの繁殖は早春に行われ、2~3羽の雛を年1回育てる。多くは山の頂上付近にある断崖の岩棚、あるいは洞穴に営巣し、ほとんど巣材を持ち込まず、直接土石の上に卵を置いて抱卵する。当地での100種以上の繁殖鳥のうち、ワシミミズクは最も早く産卵、孵化を行う。1986年3月29日、1987年4月12日いずれも発見したときは産毛の雛がいた(表1)。

表1 ワシミミズクの体位各部の測定値

巢 No	場所	採取日	計測日	鳥	体重 g	体長 mm	嘴峰 mm	翼長 mm	尾長 mm	ふ趾 mm
I	涛雩礮山	1985.4.24	1985.5.13	1	1750	480	34	344	160	80
			1985.5. 4	2	1700	470	34	340	160	80
II	同上	1985.4.12		3						
				4						
III	黄墩唐子頂	1985.5.15	1985.5.26	5	1050	320	34	185	60	50
			1985.5.26	6	1200	360	35	220	90	60
IV	三庄 崖	1986.3.29		7						
				8						
				9						

観察によると1~2月旧正月前にワシミミズクはつがいを組み、鳴き声を盛んに交わし、活動が激しくなり、交尾を行う。この時期の当地は厳寒期で、雛が孵化する3月中旬から4月上旬までは平均気温が10℃に充たない。多くの鳥類はまだ巣づくりにもかかわらず、夏鳥の渡来は未だない。日照市は南温帯に位置し、年平均気温12.6℃、無霜期間200日、初霜の平均日は11月5日、霜の最終日は平均4月13日である。

ワシミミズクは晩成の鳥で、孵化後約30日の雛の頭頂、頬、喉、胸、腹部にまだ長い絨毛が生え、頸および背部にわずかに絨毛が生えている。これらの部分にはすでに黒褐色縦紋の羽毛が生えはじめている。風切羽および尾羽には黒褐色横紋のかなり開いた羽が生えており、ふ趾および趾には帯黄白色の絨毛が生え、爪は鉛色、顔面には針状の羽毛が一面に生え、外縁は黒色であ

る。驚くと耳羽が立ち、「ga ba」と威嚇の声をあげる。

ワシミミズクは体が大きく、摂食量も多い。生長発育は緩慢で、飼育下での翼長の伸長は毎日平均2.55mmである(図1)。体重は毎日平均45g増え、6月中旬に生長は停止状態となり、この時雛の外見は、頭部、背部に残ったわずかな絨毛を除くと、成鳥と同様となり、飛翔能力も一時に5~10mも飛ぶことができるようになる。

2. 食性

ワシミミズクは主にハリネズミ、ノウサギ、ネズミ類を捕食し、時にはヘビ、カエル類も食べる。我々はかつてII号巢内で1匹のネズミの死体を発見し、III号巢下の草むらで100匹以上のハリネズミの皮と、数匹のノウサギの皮を目撃した。飼育によるワシミミズクはヒツジの内蔵(肝、心、肺)とウサギの肉、ブタの腎臓等を与えた。ワシミミズクは動物の油脂、腐敗肉類、トカゲ、魚類、イタチなどは食べない。

ワシミミズクの成鳥と雛の摂食量はほとんど差が無く、毎日の摂食量は、ヒツジの内蔵で240~260gであった。ワシミミズクは飢餓に耐性があり、十数日食べないことがある。体重2750gの成鳥が4日間の断食で490gの減量があった。ワシミミズクは他の猛禽類と同様に、まず足で獲物を捕まえ、嘴で引き裂いて食べる。ワシミミズクはペリットを吐き出す習性があるが、飼育下でもしも、骨や羽毛のない肉を食べさせると、骨や羽毛の代わりに、敷き藁などを引き裂いて食べる。

3. 生活習性

ワシミミズクは典型的な夜行性の猛禽で、日暮れ時と夜明け前に活発に行動する。ケージ内では飛びながらケージに衝突し「chi chi」と声をあげることがあるが、深夜には行動が少なく安静である。昼間はうずくまったまま、6~8時間は声も立てず、向きも変えず、飛ぶこともなく、ただ時折頸を回して周囲を警戒する。日が沈むころになると音をたてないまま両翼を半開にして、羽毛を逆立てたりする。瞳孔は大きく開き、時々「hei-hu」としわがれた声を発し、行動開始の姿勢と思われる。飼育下のワシミミズクは給餌時には「ji-ji」と鳴き、夜間には「hei-ho」と太く沈んだ、しかし、野山に通る声で鳴く。

飼育中、ワシミミズクはよく人に馴れるようになった。これはワシミミズクが夜行性で、昼は隠れており、人と接触することが少ないためであろう。飼育されたワシミミズクを放鳥しても、よくケージの周辺に現れ、遠くへは行かないようである。これは、長期に飼育され、体の鍛練が衰え、捕食行動や、対外敵警戒行動が衰え、野外における生活適応が出来なくなり、餌を求めてケージ周辺に戻ってくるのではないかと我々は考えた。もともと、5羽のワシミミズクと一緒に飼育したもので、そのうち1羽を放鳥したことから、群れを求めて戻ってきたことも考えられる。

ワシミミズクは猛禽なので、食物連鎖の頂点にあり、自然生態系の動向より受ける影響は非常に大きい。したがって保護には注意してあたらなければならない。

図1 ワシミミズクの翼長生長進度

